黒住教立教200年 記念対談

感謝の心で「誠」を尽くす 宗教界で大きな役割担う

黒住　松田

岡山市北区尾上の神道山に本部を構える「黒住教」は今年、立教200年を迎えた。黒住教は岡山藩主池田家の守護神社・今村宮の神官であった黒住宗忠（1780～1850年）が1814（文化11）年11月11日（旧暦）に立教した、幕末三大新宗教の一つ。立教以降、黒住教は福祉活動、文化活動、宗際活動にも一貫して力を注いできた。200年の歴史を振り返るとともに、黒住教の社会貢献活動が果たしてきた役割について、黒住教六代教主・黒住宗晴氏に山陽新聞社の松田正己代表取締役社長が聞いた。（文中敬称略）

黒住教 六代教主
黒住　宗晴 氏

くろずみ・むねはる　京都大文学部卒。1961年に黒住教青年連盟長、72年に黒住教副教主に就任、73年から六代黒住教教主。旭川荘理事、川崎学園監事、日本工芸会中国支部顧問など務める。岡山市出身。76歳。

社会貢献活動などについて語り合う黒住教主（写真右）と松田山陽新聞社社長

教祖・宗忠と黒住教の歴史

松田　立教200年おめでとうございます。仏教の各宗派の開祖と違い、日本人を教祖とする宗教が200年を迎えた例はほかにないと伺いました。六代教主としてどのような感慨をお持ちですか。

黒住　黒住教は日の出を拝む「日拝」の宗教であり、感動と感謝の心で、人に社会に誠を尽くすことをつとめとしています。200年の重みをあらためて感じたとき、次のことを思い起こしました。まず日本人は昔からお天道様が大好きで、朝起きたら東の空に向かって柏手を打つところから一日が始まりました。そして日本人には古来、神に祈る言葉「祝詞」があります。この二つにして一つの伝統の上に、教祖宗忠の「日拝」は生まれたということです。

松田　教祖宗忠は神職の修行に励んだ後、宗教的神秘体験を得るに至ったと伝えられています。

黒住　宗忠は明日をも知れぬ重篤の身でしたが朝日によって生きる力を取り戻し、自身の誕生日でもあった文化11年11月11日（旧暦）の冬至の朝、日の出を拝んで天照大御神と自身が一体になる境地に達しました。これが「天命直授」と呼ぶ、黒住教立教の時です。教祖は「人間は、あらゆる命の大元である天照大御神の分霊をいただく神の子である」という人間観を貫きました。

松田　教祖の没後、1862（文久2）年、孝明天皇の勅願により京都神楽岡・宗忠神社、1885（明治18）年には、教祖生誕・立教の地である岡山・大元に宗忠神社が建立され、教団として発展していきます。

黒住　京都で布教していた高弟・赤木忠春が孝明天皇のお后を病床から救ったことなどから、孝明天皇のご信仰が深まり、教祖に「大明神号」が下賜され、御所には日拝所までつくられました。本教が公武合体、開国維新とわが国の存亡にかかわるところで生き続けたことには特別の感慨を覚えます。

松田　幕末から明治の時代には厳しい局面もあったようですね。

黒住　明治政府によって神道系宗教団体はすべて国家神道に所属させられたのですが、三代教主宗篤は「人の心まで政治が規制することは、国の将来を誤らせる」と訴え、大運動の末に別派独立。後に続いたのが金光教、天理教です。

社会貢献活動

松田　黒住教が歴史的に日本の宗教界に果たした役割は大きいと思いますが、昭和に入ってからは他宗教・他教団と交わり、社会福祉活動、文化活動にも力を注いでおられます。特に戦後、戦災孤児らを受け入れる児童養護施設「天心寮」（赤磐市）創設に続き、1967年の重症心身障害児施設「旭川児童院」（岡山市）開設に向けて社会運動を展開され、山陽新聞社もキャンペーンを張りました。当時、宗晴教主は黒住教青年連盟長として運動の先頭に立たれました。

黒住　重症児施設の開設運動は、旭川荘を創設した故・川崎祐宣先生（川崎学園創設者）と私の父が親友で、一人の身に四重、五重の障害を持つ子どもたちを受け入れる施設が中四国になかったことから始まりました。街頭募金や著名な芸術家、宗教者の作品提供によるチャリティーも行いました。困っている人のために行動するのは自然の流れです。

松田　黒住教の奉仕の精神は、阪神淡路大震災、東日本大震災でも発揮されました。

黒住　阪神淡路大震災の時は現地で51日間、毎日5千食の炊き出しを続けました。日本人は地震が起こるたびに誰を恨むでもなく、すべてを受け入れ、立ち上がってきた。「困ったときはお互いさま」と、この時も大勢のご協力をいただきました。また東日本大震災の被災者支援は今もいろいろな形で続けています。

松田　黒住教は世界の他宗教・他教団との交わりを重視されています。1995年にはチベット仏教の最高指導者ダライ・ラマ法王を責任教団となって日本に招聘されました。どのようなお考えからですか。

黒住　宗教には人々の幸せに奉仕し、世界の平和に努める責務があります。宗教が争いのもとにならないよう、異なる宗教同士が交流し、共働することが肝要です。

松田　2000年、ニューヨークの国連本部で開かれた「ミレニアム世界平和サミット」（世界宗教指導者サミット）では、宗晴教主が閉会のスピーチと祈りを捧げられ、山陽新聞社もカメラマンを派遣して報道しました。

黒住　本教の提案で〝ヨーロッパの火薬庫〟と呼ばれていたバルカン半島各地からさまざまな宗教の代表を招いた会議ももたれ、その渡航費は岡山財界の方々の浄財で賄われました。その後の平和への道すじにつながったのは大きな収穫でした。

阪神淡路大震災での炊き出し奉仕＝1995年、兵庫中学校

「ミレニアム世界平和サミット」での黒住宗晴教主（右）と宗道副教主＝2000年、国連本部総会議場

松田　文化活動も積極的に展開されていますね。

黒住　日本の文化を理解してもらおうと、ニュージーランドのカンタベリー博物館、オーストラリア・ニューサウスウェールズ州立美術館、米国・ポーク美術館などに、本教に委託された人間国宝をはじめ日本の現代陶芸作家の作品を寄贈しています。また吉備の国岡山に伝わる古典楽と雅楽を一つにした「吉備楽」と「吉備舞」を伝承し、国内外に紹介しています。文化活動も福祉活動も、活動する場の多くは皆さんから与えていただいたものです。

多彩な奉祝行事

松田　立教200年のさまざまな奉祝行事が続いています。

黒住　最初が一昨年の京都神楽岡・宗忠神社ご鎮座150年記念祝祭でした。昨年は縁の深い伊勢神宮の式年遷宮の年で、新宮に白石を運ぶ「お白石持行事」に約2千人が参拝奉仕し、内宮の遷御の儀には私と副教主、八代宗芳の親子孫3代で参拝する栄誉に浴しました。今秋は立教200年大祝祭を、来年には大元・宗忠神社ご鎮座130年記念祝祭を行います。

松田　21世紀は〝心の時代〟と言われています。「徹底楽天・徹底前向き…」といった教祖の教えは現代社会に通じると思いますが、黒住教が今後、社会に果たしていくべき役割について、決意をお聞かせください。

黒住　「人は日止まるがゆえの人」という教祖の言葉があります。「日」は日の御霊のことで、人間は体の奥深くに御霊、命の核を持っています。先に申し上げた通り、すべてを受け入れるのが日本人ですが、この本体の働きを邪魔するのが我欲、我執です。御霊をいかに養うか。日常の生活も仕事もその視点を持てば、人生はもっと充実したものになるでしょう。宗派・教団を超えて、人間として、日本人として、より心豊かに生きていただくために少しでも役に立つ教団でありたいと願っています。

より心豊かに生きるために

宗派超えて奉仕したい 福祉、文化面にも尽力

黒住　松田

松田　正己
山陽新聞社社長

まつだ・まさみ　香川大経済学部卒。1973年山陽新聞社入社。東京支社長、広告局長、取締役編集局長、常務取締役倉敷本社代表、専務取締役などを経て、2014年6月1日から代表取締役社長。岡山市出身。64歳。